

八幡のケヤキ



下郷町中山地区の県道下郷本郷線を北に向かうと、左側に大きなケヤキの木があります。

樹齢1,000年と言われ、県の天然記念物にも指定されている「八幡の大ケヤキ」です。

樹高34.5m、根元の周囲は12.1mもあり、道路を覆うように悠々と鎮座するその姿には圧倒されます。



「八幡」の名は八幡太郎義家(源義家)に由来するもので、説明看板には次のように書かれています。

平安時代の天喜3年(1055)、奥州を支配し朝廷に反逆していた安倍氏一族を八幡太郎義家が出羽国の清原氏と組んで亡ぼしますが、その討伐に向う途中でここ中山を通り掛かった際、険しい道に難儀したため、中倉村の司で

あった二宮太郎兵衛宅で休息しました。

二宮氏は快く迎え入れ、大沼郡尾岐村に至る間道を教えるなどして手厚く歓待したのだそう。

そのおかげで八幡太郎義家は首尾よく賊を討つことができ、義家が感謝のしるしとして二宮邸の庭先にケヤキを植えたのがこの大ケヤキだと伝えられています。

以来、このケヤキは先祖代々、中山集落の人たちで大切に守り継がれてきました。



また、ここは旧下野街道沿いであり、戊辰戦争では会津軍がここ中山周辺に潜伏して西軍(新政府軍)を迎え撃ちますが、会津藩兵士の書いた維新録には、「酣戦中 我が隊士 沖津清巨樹(八幡の大ケヤキ)の洞窟より踊り出て、槍を揮って敵将彦坂孝次郎(宇都宮藩)を斃し、この他殺傷頗る多し、西軍敗走すること半里」と紹介されています。

戊辰戦争当時もこのケヤキは今とほぼ変わらない巨木だった訳で、会津藩士がこの大ケヤキの窪みに隠れて戦っていたのです

ね。

平安から1000年もの間、風雪に耐え抜いてきた八幡の大ケヤキからすれば、150年前の戊辰戦争もつい最近の出来事。

威風堂々としたこの八幡のケヤキの歴史の重みを感じました。